

2018 vol.42 夏号 源流からのたより

# ぽたいたい!

源流のひとしづく



## CONTENTS

- ・ 事務局長コラム
- ・ 「源流学」 ⑩
- ・ 源流の主役たち
- ・ 丹生川上神社上社
- ・ 吉野川紀の川しらべ隊
- ・ 源流学の森づくり



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平  
公益財団法人吉野川紀の川源流物語  
TEL 0746・52・0888  
FAX 0746・52・0388  
URL <http://www.genryuu.or.jp>  
E-mail [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)

# 環境白書に掲載!

〜地域循環共生圏をテーマにした先進的取組〜

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大



## 環境白書って!?

「〇〇白書」という言葉を耳にされたことがあると思います。政府各省庁の分野ごとに、その年の状況や活動、将来の方向性などをまとめた国の公式文書です。もともとイギリスでは表紙が白色であったことから白書と呼ばれるのとこの。このたび、環境省による平成30年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書が閣議決定され、国会に提出されました。

## 流域連携の先進事例として

本年の白書では、「地域循環共生圏の創出による持続可能な地域づくり」をテーマとして、第五次環境基本計画（平成30年4月閣議決定）で提唱された「地域循環共生圏」の創造に向けて、地域資源を持続的に活用することで地域に活力をもたらす取組や、ライフスタイルの転換に向けた取組等について、我が国で既に始まっている先進的な取組事例等が紹介されています。

なんだか難しい言い方ですが、「地域循環共生圏」を私たちの地域のことで言うと「流域圏」。つまり吉野川・紀の川の上流から下流の地域を県や市町村の枠を超えて捉えるということだと思えます。川上村が以前から唱え、私たちの財団が具体的行動としてきた「流域連携」のおはなしです。

## 「紀の川じるし」の旗のもと!

この環境白書で先進事例として取り上げられたのは、「紀の川じるし」の取組です。紀の川という1本の川が、つなぐ地域、上流・中流・下流それぞれで林業、農業、漁業という質の高い第一産業が営まれてきています。これらが持続することと流域の水環境や景観・風土そして生業を守り育てていくことにつながります。そんな思いを消費者が選択する行動として働きかけています。「紀の川じるし」の旗のもとに、流域の生産者や加工事業者が集い仲間となって活動の輪を広げています。川上村では地域おこし協力隊が立ち上げた「やまいき市」で流域の

産品を取り上げてきました。また「紀の川じるしの見本市」というイベントを毎年春に紀の川市内において開催しています。最近の話題で言えば、川上村で始まったダムカレー。そこに流域の産品を使うことが条件のひとつになったり、この企画に紀ノ川農業協同組合の直売所にあるカフェのスパイスコーディネーターが関わってくれています。そして私たち財団はリーディングランナーとして地道に活動を続けてきました。

「紀の川じるし」は単なる物産のことだけではなく、行政枠では解決が困難な地域の課題を「流域圏」という新しい考え方で捉え、「みんなで考えていこう」「きつとできることがあらず」を目指した考え

方です。まだ始まったばかりのこの取組みを「地域循環共生圏」の創造というテーマで紹介いただけたことは、まことに光栄です。

## 根本は『川上宣言』

そして、いつも私の心にある『川上宣言』に照らしてみれば、1番目の「下流にはいつもきれいな水を流します」のおもいを流域の人々と共有することをめざしてコツコツと取組んできた結果、ずっと遠い目標と思ってきた宣言の5番目にある「地球環境に対する人類の働きかけのすばらしい見本になるよう努めます」に近づけたことがうれしく思いました。これからもみなさまといっしょに取組みを継続していきたいと思えます。どうぞ応援ください。



「紀の川じるし」の詳しくは動画で  
<https://www.youtube.com/watch?v=JKdaYFkNkg0>

# 7

月に入ると、わが家では「小麦餅」を作る。みんなは、「小麦餅」を知ってるやろか。これはな、つぶした小麦を使って作る餅でな、奈良の郷土料理でもあるんや。6月の半ばには、だいたい小麦の収穫が終わる、田植えも一段落するころに、作る餅で、夏至から数えて11日目の「半夏生（はんげしょう）」のころに食べる餅から、「はげっしょ餅」とも言われとる。まあ、むしろは「小麦餅」と言うのとるけどな。

# わ

しら柏木（川上村）では、小麦は作られへんけど、小麦や大麦、粟、キビなど、なんでも作ってた。子どものころ、よう麦踏みしてたなあ。踏みへんたら、ひよろひよろの麦になってしまふから、「麦踏みほーい」という歌を歌いながら、しっかり踏んだことを覚えとる。でも「麦踏みほーい」という歌はどんな歌やったかはあんまり覚えてへんけどな。

# 食

べもんのことは、おかちゃん（嫁）が先生やから、「おい、小麦餅、どない作るか、ちよつと説明してくれへんか」。

# お

かちゃんの話）小麦餅は、小麦をつぶしたものと餅米を一緒に入れてついて作って、それを豆の粉につけて、食べてんや。分量はな、餅米1升に、つぶした小麦5合の割合で、米が貴重だった昔は、もち米とつぶした小麦が半々やったこともあった。

# 作

り方はお餅と一緒にな、餅米はよく洗って一晩水につけた後、ざるに上げて水をよくき

て、その上に、さつと洗ったつぶした小麦をのせて、一緒に蒸して、あとはよくつくんや。小麦の餅は、夏の餅と言われててな、昔は、柿の葉に小麦餅をのせて、神さんにお供えしていたんやで。

# お

おきによ。わが家は、おかあ（母親）がやってきたことを、おかちゃん（嫁）が、同じようにやってくれるから、ありがたいんや。わしの子どもらも、そと（村外）に出て行ったけど、餅作ったり、ちまき作ったりしたら、おかちゃんを送つとるから、その味はよう知つとる。やけど、嫁や孫らが、おんなじように作れるかと言うたら、もう無理やな。都会では、田舎とおんなじように、季節のもの（植物）を使いながら、何かする方が難しいわ。残念なことやけど。

# 小

麦餅やけど、わしらは、若い時分は、麦をつぶさんと、まるっぽだけ（つぶさず、そのままの麦）で、やってん。やから、もつと、ぶつぶつしてて、食うたら、もらもらしとつたわ。いまやたら、つぶした小麦を使うさかい、餅ついとる間に、形がうなつて、食べやすくなつとる。

達ちゃんが語る

## 子どもたちに伝えたい「源流学」

⑩季節に食べる

餅の話



小麦餅に使うつぶした麦。冷凍保存が可能。

# こ

のつぶした小麦は、冷凍して保存しとる。小麦餅の後に作る餅が、「土用のはらわた餅」。まあ、あんつけ餅や。丸めた餅の回りを、あんこでぐるっと巻いた餅や。

# な

んで「はらわた」と言ったのか、よう分からん。おかちゃん（嫁）の里は、「はらわた餅」とは言ってなかつたそうやけど、うちの母親や、川上では、そう言っていた。これもちよつと小麦粉入れてやるこうしとる。息子が好きやつたから、山の神さんへのお供えのときとかに、おかちゃん（嫁）が余分に作ってたそうや。

# お

供え用のお餅は、だいたい2升で作るんやけど、余った餅のところは、普通のお茶碗に、8分ほどのめりんけん粉を水でといたものを混ぜて、つき直し、それをようかん流しのところに入れて固めとくんや。こうしとくと、3日も4日も、やるこいまま持つんや。それをまんじゅう屋さんは、やろうこうするため、添加物を入れたりする。家で作

たもんは安全で安心や。

# は

らわた餅のあんこは、わしのところは、何でもこしあんやなあ。小豆1升とたつぷりの水で、やるこうなるまで炊いて、やるこうなつたミキサーにかけて、袋に入れて絞つたのが、あん。水とあんが分離するから、あく抜きはしらんらしい。常々、たつぷりの水を使いながら、炊くそうや。そのあん砂糖1kgで、火にかけて、こしあんをつくる。ここでは白砂糖を使うけど、ほかの豆を炊く時は、わが家は氷砂糖を使うそうや。氷砂糖の方が味がしつこうなくて、うまいんやと。

# 生

活の知恵は、昔の人に教えてもらわなあかん。今の人はすぐ分量はどのくらいと聞くが、こんなのは経験からわかってくることや。昔は、「野良の節句働き」と言つてな、節句の日に働いたらな、擲擻された。仕事を休んで、みんなでお祝いしつたよ。節目、節目に休んでお祝いする風習があつたなあ。こういうことも、もちを作つたりしながら、伝統や行事が残っていくんや。民俗学をしていた大学の先生が、お年寄りが1人なくなつたら、文化風習がなくなり、それに付随したもので消えていくといった。日本の伝統行事は、自然界の旬と合致しとつて、わしらの暮らしや食べ物につながっていた。そのとき、そのときの旬に合わせて食べものを作つたり、まつりごとをしつたりすることの大事さを、もう一度、思い返してほしいと思う。

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

## ホンサナエ（本早苗）・・・・・・・・・・・・・・・・



イネの早苗の時期に姿を現すことから名付けられました。近年、全国的に個体数を減少させている種で、奈良県レッドデータブックでは希少種に選定されています。大きく短い独特のフォルムは、太い釘のようであり、サナエトンボ科の科名が、古代ギリシャ語の楔や釘を意味する言葉から由来して Gomphus <sup>ゴンプス</sup> になったことにならずけ <sup>どうしよてき</sup> ます。ホンサナエの生息する河川には同所的にアオサナエとアオハダトンボが生息している場合が多いです。

体長：約 48 mm～52 mm

出現時期：4月中旬～6月

## オナガサナエ（尾長早苗）・・・・・・・・・・・・・・・・

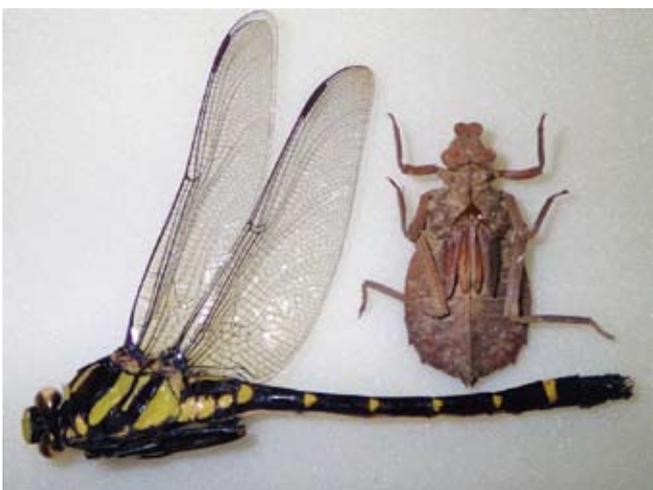
成虫の尾部付属器が長いことから名付けられました。夏の終わりまで姿を見ることができる種で個体数も多く、河川敷で脱殻採集をしていると、石にくっついている脱殻のほとんどがオナガサナエであり、途中でうんざりしてしまうこともしばしば。それでも成虫の姿を見ると妙に嬉しくなってしまうのは、この種の格好良さのなせる業だと思えます。

体長：約 58 mm～66 mm

出現時期：5月下旬～9月下旬



## コオニヤンマ（小鬼蜻蛉）・・・・・・・・・・・・・・・・



昔の人は、大きなトンボを蜻蛉（エンバ・ヤンマ）とよんでいました。そのため、ヤンマ科でもなければオニヤンマ科でもない、サナエトンボ科の大形種であるコオニヤンマにも蜻蛉の名が付けられています。枝先にぶら下がって止まらず、河川の石や植物に腕立て伏せをするように止まること、複眼が離れていること、小顔なことから、オニヤンマと区別できます。

体長：約 78 mm～92 mm

出現時期：5月下旬～9月中旬

図鑑を見るよりも、捕まえて比較しないと見わけの付きにくいサナエトンボの仲間ですが、出現時期、幼虫形態、生息場所など種によってちょっとずつ違いがあります。実際にフィールドに出て調べてみると様々な発見があると思いますので、是非一度、ご自身で採集してみたいはかがででしょうか？



# 流水の脇役



4月から森と水の源流館の常勤スタッフとして着任いたしました、古山 暁（こやま あきら）と申します。昆虫が専門で、特にトンボ目昆虫が大好きです。これまでも、源流館の観察会で講師をさせて頂いたり、ぼたりに寄稿させて頂いたりしていたので、ご存知の方もいらっしゃるかとは思いますが、今後ともよろしく願いいたします。



古山 暁（森と水の源流館 常勤スタッフ）

トンボと聞いて真っ先に思い浮かべる環境といえば、水辺が挙げられることでしょうか。その水辺のイメージは、沼やため池などの水の流れない環境ではないでしょうか。幼虫時代に池沼で生息するトンボを止水性トンボ、幼虫時代に河川で生息するトンボを流水性トンボと区別します。止水性トンボは容姿や色彩に富んでおり、なおかつ目立ちやすい場所に居るため、認知されやすいですが、流水性のトンボはカワトンボ科を除くと、ほぼ一律に黄色と黒の縞模様のため目立たず、そして一般的には同種に思われがちです。今回はそんな地味路線まっしぐらな流水性トンボの中でも、上流域から中流域を生息場所とする、独特なフォルムを持つサナエトンボの仲間を紹介します。

## オジロサナエ（尾白早苗）



成虫の尾部付属器（腹部末端にある交尾の時にメスの首をつかむ器官）が白いことから名づけられました。河川に生息するサナエトンボの仲間としては小型種になります。幼虫や抜け殻はたくさん見つかるにもかかわらず、河川では成虫がなかなか見つからない不思議な種です。河川近くの林縁やツルヨシの群落で休んでいる姿はよく見かけるので、ひょっとしたら私との巡り合わせが悪いだけなのかも…

体長：約 41 mm～ 46 mm  
出現時期：5月下旬～9月中旬

## アオサナエ（青早苗）

生きているときは鮮やかな緑色をしているサナエトンボ科屈指の美麗種です。オスは日当たりの良い河川の石の上に縄張りを作ります。奈良県内では生息している河川が少なく、奈良県レッドデータブックでは希少種に選定されていますが、吉野川で脱殻が、吉野川の支流で成虫が確認できています。

体長：約 55 mm～ 62 mm  
出現時期：4月下旬～7月下旬



## その二八

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

## 「丹生川上神社上社」

平成30年は、丹生川上神社上社が現在地に遷座して20年目の記念の年で、5月20日には「遷座二十年奉祝大祭」が執り行われました。

「丹生川上神社」は、天武天皇（在位673～686年）が、夢のお告げをもとに創祀したと伝えられる古い神社です。

奈良時代から室町時代まで、国が水の祭祀を行った由緒を持ち、現在、川上村・東吉野村・下市町に、上社・中社・下社の三社に分かれて祀られています。

「丹生川上神社」に関する記録が残るのは、奈良時代の天平宝字七年（763



図1 遷座前の丹生川上神社上社

年）からで、以降、歴史書や儀式書に頻繁に登場しますが、室町時代に祭祀が途絶えると、場所も忘れられてしまいました。江戸時代以降、所在地の探索がなされ、川上村・東吉野村・下市町の候補地に分けて祀られたのが、三社の由来です。上社は大滝ダム建設に伴って遷座することになり、旧境内地が発掘調査されました。その結果、上社の場所は奈良時代には既に祭祀の場となり、平安時代後期に石敷きが作られ、その上に、鎌倉・室町・江戸時代に社殿が建てられたことが分かりました。また対岸の森林を伐採したところ、社殿の背後に巨大な白い岩があり、その岩と白屋岳と吉野川の淵を拜める位置を選んで社殿が建てられた事も分かりました。

古くから山や森林は、水神が住む場として祭祀の対象になっていました。最古の神社の一つ、大神神社（桜井市）は、三輪山をご神体としています。上社も、白屋岳をご神体とした、水神を祀る古い神社であることが明らかになりました。さて、上社に参拝すると2つの馬の像が目に入ります。これは雨を降らせたい時には黒馬を、止ませたい時は白馬を「丹生川上神社」に奉納した故事に基づいています。ユーラシア大陸の各地には、水神と馬に関わる神話が残されています。例えば『西遊記』での三蔵法師の乗馬は、西海竜王の子の化身です。水神と馬が交わりと名馬（竜馬）が生まれるという話もあります。河童が馬を川に引き込む伝説が多いのは、水神（竜・河童）と馬との相性の良さを示しています。上社の発掘調査では、塩を入れていた古代の土器（製塩土器）が出土しています。塩は馬の飼育に必要不可欠で、古代の牧場は塩を含む温泉の場所を選んで作られたという説もある程です（註1）。

「丹生川上神社」の境内で馬が飼われていた記録もあるので、もしかしたら、この土器は馬の飼育に関わるものなのかも知れません。3年間にわたる発掘調査でも、上社が「丹生川上神社」であるとの確証は得られませんでした。少なくとも奈良時代には、吉野川上流の川上村の地が、水の水神を祀る特別な場所とみなされていたことは確かです。かつての上社は現在、おおたき龍神湖の浮島の下に眠り、毎年7月には、竜神が湖から上社に登っていく姿を灯籠で表した七夕灯籠祭が行われています。ぜひ上社にお参りして、現代に繋がる水源地の歴史を体感してみてください。



図2 平安時代の石敷き遺構（拝殿前に移築）

註1

橋本裕行氏「奈良県立橿原考古学研究所」川上村歴史講座「温泉考古学事始」（2016年2月20日）での講演による。

参考文献

『宮の平遺跡Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第84冊 2003 奈良県立橿原考古学研究所編

石田英一郎 1994 『新版 河童駒引考 比較民族学的研究』岩波書店

吉野川紀の川しるべ 4月21日 ギフチョウをしるべよう

川上村は、ギフチョウの野生南限になっている貴重な生息地です。最近までは、和歌山県の龍門山が南限でしたが、数が減って見られなくなつたため、地元の自然保護団体などが奈良県葛城山のギフチョウを放蝶する取り組みを行いました。その個体群が定着し、あるいは残っていたものと雑種となつて、現在ではギフチョウの姿が見られませんが、もともと生息していた個体群ではありません。

(一社)かわかみらいふさんの協力で、北和田のふれあいセンターおよびその周辺で開催しました。午前中は、川上村におけるギフチョウの再発見者でもある伊藤ふくおさんにギフチョウや川上村の大切な虫についてお話をいただきました。午後からは、周辺でギフチョウを探しつつの春の昆虫観察を楽しみました。



(上) ギフチョウ (下) ナミアゲハ



### 観察した生物 25種

#### (コウチュウのなかま)

シロテンハナムグリ・コアオハナムグリ・ルイスアシナガ  
オトシブミ・アシナガオトシブミ・ヒメクロオトシブミ・  
オオセンチコガネ・ヒメアカホシテントウ

#### (チョウのなかま)

ヤマトスジグロシロチョウ・スギタニ  
ルリシジミ・トラフシジミ・ヤマトシジミ・ベニシジミ・  
アカタテハ・モンシロチョウ・キタキチョウ・ツマキチョウ・  
コツバメ・テングチョウ・ルリタテハ

#### (ハチのなかま)

キムネクマバチ・キイロスズメバチ・セ

#### グロアシナガバチ

#### (カメムシのなかま)

クサギカメムシ・オオメナガカメムシ・  
チャバネアオカメムシ

吉野川紀の川しるべ 4月28日 野鳥や虫をしるべよう

森と水の源流館から丹生川上神社上社までの間を、講師の伊藤ふくお先生、笹野義一先生に教わりながら、野鳥や虫を中心にいろいろな生き物を見つけると12人の参加者と一緒に観察しました。

### 観察した生物

**【野鳥】10種** イソヒヨドリ・ヒガラ・アカゲラ・オオルリ・トビ・ハシブトガラス・ウグイス・ツツドリ・ツバメ・イワツバメ

**【昆虫】30種 (コウチュウのなかま)** ヒメクロオトシブミ・オオセンチコガネ・ナミテントウ・ナナホシテントウ・コアオハナムグリ・アシナガオトシブミ

**(チョウのなかま)** テングチョウ・モンシロチョウ・クロアゲハ・コミスジ・ベニシジミ・アカタテハ・アサギマダラ・ヤマトシジミ・トラフシジミ・クロコノマチョウ・ムラサキシジミ・イカリモンガ

**(ハチのなかま)** クロヤマアリ・クロオオアリ・セグロアシナガバチ・ウマノオバチ・キムネクマバチ・ムモンホソアシナガバチ

**(カメムシのなかま)** チャバネアオカメムシ・クサギカメムシ・オオメナガカメムシ・ノコギリヒラタカメムシ・アカサシガメ

**(ハサミムシのなかま)** コバハサミムシ



キリの花が満開でした

野鳥の方では、オオルリやアカゲラが近くまで来ていて、鳴き声をじっくり聞くことができたのですが、観察できるところまでやってきてくれなかったのが残念でしたが、川上村の中心部でもあるこの辺りにも、たくさん生き物がくらしてることがよくわかりました。

吉野川紀の川しるべ 5月6日 吉野山のコケをしるべよう

吉野山の玄関口、近鉄吉野駅から七曲りの坂までのコケを道盛正樹さん(認定NPO法人大阪自然史センター)と木村で案内しながら、19人の参加者の皆さんと一緒に観察していきました。吉野山は吉野熊野国立公園内にあり、日本を代表する自然の風景地として保護されています。環境省近畿地方環境事務所吉野自然保護官事務所の青谷克哉自然保護官補佐から、まずは国立公園についての説明を聞いた後、観察をはじめました。

天候にも恵まれて、吉野駅から七曲りの坂までのコケを観察しました。樹木に生えるコケによって、大気汚染の程度がわかることも学びました。また、神社の手水鉢には吉野川源流の沢沿いで多く見られるアオハイゴケがたくさん生えて、きれいな水が流れていることもわかりました。ゆつくり、じっくり観察した結果、七曲りの坂の一曲がりもできずにも時間が来てしまい、終了となりました。



樹幹のコケの説明を聞いています

源流学の森づくりとは、30年ほど前に伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。



サクラの樹幹にたくさん着いていたサヤゴケ

### 観察したコケ 24種

(苔類)

フルノコゴケ・カラヤステゴケ・コハネゴケ・ジャゴケ・アズマゼニゴケ

(蘚類)

エゾスナゴケ・チュウゴクネジクチゴケ・ハマキゴケ・サヤゴケ・コモチイトゴケ・バガハシゴケ・ヒメシノブゴケ・オオトラノオゴケ・タマゴケ・コクシノハゴケ・ネズミノオゴケ・ミヤマサナダゴケ・ヒロハツヤゴケ・アオハゴケ・フトリュウビゴケ・トヤマシノブゴケ・ナガヒツジゴケ・ナガバチチレゴケ

(順不同)



作業拠点となる山小屋や途中の林道などの修理にスギ材やヒノキ材を使うこともあります。今回は、源流人会員さんや、川上村大好きさんなど、9名が集まり、人工林の間伐作業を少し体験しました。体験の指導も、源流人会員さんで、林業に携わられる方にお願いしました。間伐の必要性、作業手順や安全管理、手入れが続けられてきた人工林のおかげで木材の他にも水や空気など様々に受けられる恩恵、実際に森の中で聞く話からその大切さがひしひしと伝わります。明け方まで降り続いた雨も上がり、少し肌寒くはありましたが、絶好の作業日和となったこの日、参加者の皆様が何よりも楽しんでおられたのが皮をむく作業でした。

川上村には手つかずの森も再生しつつある森も人が育てている森もあります。それぞれの森に色々な形で親しんでいたければ嬉しいです。

例年ならばまだ時期が早いのですが、今年は暖かかったためか、きれいにむくことができました。つるつるすべすべずつと触っていたくなる感触です。材として利用する場合、間伐木は斜面上側へ倒します。上手に伐れば、根元の方が切株に乗った状態になりますので、地面に直接ふれず、風が通ります。その上で、余分な枝を落とし、樹皮をむいておくと、残った葉から水分が蒸散されて木材が乾燥し、色艶が良くなります。そんな吉野林業の歴史とともに培われてきた工夫も「知る」と「する」では大きな違いです。

むいた皮もなめして加工すれば刃物入れが作れますが、生憎と職員にその器用さはないのでそのまま自然に返しましたとさ。



## 源流人募集



### 源流人とは

かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

### 源流人会とは

集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

## 水源地の森守募金

にご協力ください



ありがとうございました。

平成29年度、243,317円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

表紙の写真：水源地の森ではヤマツツジが満開でした。カラスアゲハもうれしそうに花を訪れていました。